

日本剣道の国際化における課題と提案

～柔道との比較において～

1180508 吉木 祐太

高知工科大学マネジメント学部

はじめに

1964 (昭和 39) 年の東京オリンピックで柔道が正式種目となり、2020 年の東京オリンピックで新たに空手が正式種目として追加される。その一方で、同じ日本を代表する武道である剣道は、東京オリンピックの追加競技の候補にすらあがっていなかった。つまり、同じ武道でありながら、オリンピック競技化に関して、柔道と剣道とでは全く違った方向を歩んでいる。

柔道は、世界 190 ヶ国以上で行われており、愛好者は 1 千万人を超えている。また、フランスでは学校体育に取り入れられ、エストニアの高等教育やポーランドの一部では体育の必修教科にもなっている。日本の国技でありながら、日本だけに留まることなく国境を越えて世界中で受け入れられていることが分かる。オリンピックにはじまり国際化へ順調に歩んでいるように見える。しかしながら、武道の本質である「人間形成」という特性を喪失し、異質の身体的スポーツになってしまっているのではないだろうか。

一方で、日本の剣道界は、剣道こそが世界に誇る日本の武道であるという姿勢を一貫している。1970 年に国際的な普及・浸透をはかり、加盟団体相互の信頼と友情を培うことを目的として国際剣道連盟が発足した。ただ、国際的普及をはかるのであれば、オリンピック競技化することが剣道の国際発展、ひいては剣道の認知度の向上や競技者の人口の増加につながる「特効薬」ではないだろうか。

私自身、小学 2 年生の時に剣道をはじめ、15 年間剣道を続けてきた。しかし、剣道がなぜオリンピック競技になっていないのかがどこか引っ掛かるものがあった。また、学生時代の県内で開催される規模の大会に参加してみても選手の数は多かった覚えがあり、その数は柔道と比較してみても引けをとらないものであると感じる。むしろ日本国内の剣道競技人口は約 177 万人で、柔道の日本国内の競技人口 17,5 万人と

比較してみても剣道の競技人口が約 10 倍の多さを誇っている。しかし、具体的な数字はわからないが、剣道はメディアにはあまり取り上げられる機会はないように思える。この剣道の現状に私は何とかならないものかと感じていた。

そこで、本研究では、剣道の国際化の可能性の考察をして、その現状と課題を明らかにする。また、柔道との比較を通して日本剣道における課題と提案をしていく。

第一章 剣道の現状と課題

第一節 日本剣道の現状

日本の伝統武道のひとつである剣道は、国内に留まらず 1964 年 10 月に東京オリンピック大会で弓道、相撲とともにデモンストレーションを行った。それ以来、国際的な普及を図ってきた。

2015 年 5 月時点で国際剣道連盟に加盟しているのは 57 の国と地域である。ヨーロッパでは、オーストラリア、ベルギー、チェコ、アジアでは日本の他に韓国、中国、台湾など、世界各地で剣道が行われている。1970 年の設立当初の加盟団体は、オーストラリア、ベルギー、ブラジル、カナダ、フランス、韓国、モロッコ、オランダ、台湾、スウェーデン、スイス、アメリカ、日本の 15 ヶ国、およびハワイ・沖縄の 2 少地域計 17 団体であったことから考えると、少しずつではあるが加盟国は着実に増加していることが分かる。また、2007 年には剣道連盟に未加盟の国も合わせると約 100 の国と地域で剣道が行われていたという。とはいえ、この時の柔道は 195 ヶ国で行われていたというから、剣道はその半数ほどであったという状況である。着実に剣道の国際化は進んでいるものの、柔道と比較してみると大きな差が生じているというのが現状である。

ところで、剣道の海外普及を目指すのであれば「言語化」が求められる。そもそも、武道や武芸といった日本の伝

統文化は「非言語」的な世界である。剣道に置き換えてみても、技（技術）は事細かく説明され指導手順を示すものではなく、見本となるものの動きを真似て盗むものであった。しかし、武道が学校教育に導入され、そして海外に普及していく過程の中で、「言語化」が理解の効率化において必要不可欠なものとなった。この「言語化」は、日本剣道を異文化の社会においても理解してもらうためにも、極めて重要なものであると言える。

また、剣道の海外普及において「審判員問題」が顕在化している。剣道の試合は、相手との駆け引きの中で瞬間的に己のすべてを技で体現するという特性がある。そして、この技を評価する審判員は、剣道を修練している高段者でなければ見極めることが難しいとされている。このように、機械が判定を行うのではなく人が判断して、評価するという剣道のスタイルは、武道の魅力でありながらも客観性を重んじるスポーツと比較すると弱点となり得る。

第二節 日本剣道の歴史

剣道は「日本古来の武道」として根付いている。剣道は古武道の剣術から江戸時代後期に発達した防具着用の竹刀稽古を直接的な起源とされている。その後、念流（一刀流）、神道流（示現流・天然理心流）、陰流（柳生新陰流・直心陰流・神道無念流）といった流派が現れたが、その流派を超えての試合が広く行なわれるようになった。そして明治時代以降に大日本武徳会が試合規則を定め、競技として成立することになる。その後の競技としての剣道は、第二次世界大戦後に日本の古武道を伝承している大日本武徳会は解散して、事業内容は後に発足した全日本剣道連盟に引き継がれている。大日本武徳会は戦前の日本で、武道の振興、教育、顕彰を目的として設立された財団法人であった。現在、剣道は事実上スポーツとして分類されているが、全日本剣道連盟は、『剣道は剣道具を着用し竹刀を用いて一対一で打突しあう運動競技種目とみられますが、稽古を続けることによって心身を鍛錬し人間形成を目指す「武道』』としている。

武道とスポーツの違いは「残心」があるかという点であると思われる。残心とは、武道の世界ではよく使われる言葉であるが、技を決めた後も気を抜かず次への攻撃に備えるという心構えを意味している。実際に剣道の試合では技を1本決めて

もその後にガッツポーズをすると1本になった技が取り消されてしまう。

第三節 剣道による人間形成

1975年、全日本剣道連盟は、剣道の理念として「剣道は剣の理法の修練による人間形成の道である」という一文を明文化した。この一文は、日本における剣道の考え方をもっともよく表しているように思える。

第二次世界大戦後、剣道は「戦うための精神教育であり、その訓練でもある」という理由から一時禁止されたが、その火が消えかかったことなどまるで嘘のように、日本全国で盛んに行われるようになった。学校や警察、社会人など、あらゆる場で、まさしく老若男女を問わずに多くの人達が稽古に汗を流している。また剣道は、生涯学習の模範的な存在であり、年齢が高くなっても続けることができる場所に特徴がある。人々は生涯にわたって何を求めて稽古しているのかということと考えたとき、やはりそれは人間形成ということに行き着くように思える。もちろん全日本剣道選手権大会をはじめ実に多くの競技大会が開催され、現代剣道においてその競技性は欠くことのできないものであることは確かである。しかしそれだけではない、その競技性をも含めて最終的な目的を人間形成に昇華させてきたところに剣道の文化性の最たるものがあるように感じられる。

現代社会における剣道の存在意義の第一は、人間形成としての教育的効果とあってよいのではないだろうか。

第四節 国際発展への課題

先述のように、1964年の東京オリンピックで国際的普及をはかり、弓道、相撲とともにデモンストレーションが行われた。デモンストレーションの内容としては、剣道における形けいこである日本剣道形、掛かり手が元たちに掛かっていく掛かり稽古、東西対抗試合である。剣道の世界人口は約260万人といわれており、日本で180万人、韓国が約60万人と世界的に見ても剣道人口は上昇傾向にある。また、大会については、3年に1度世界剣道選手権大会も開催されており、世界各地に剣道が普及しつつある。しかし、国際化する上でいくつかの課題が出てきている。韓国を中心にある「剣道をオリンピック種目に」との意向に対して、国際剣道連盟の会

議においては常に慎重論が占めてきた。これは、競技化に伴う質的变化や勝利至上主義の生み出す弊害があったからである。つまり、武道である「剣道」からスポーツ競技としての「KENDO」に変容してしまうことを恐れたからである。武道である剣道の正しい発展を慎重に見極めることが必要である。

略式名称	結成年度	発足時の加盟国数	現在の加盟国数	現在の会長国
IJF(柔道)	1951	11	199	豪州
FIK(剣道)	1970	17	47	日本
WKF(空手道)	1970	33	173	スペイン
IAF(合気道)	1976	29	42	日本
INF(なぎなた)	1990	7	13	日本
IKYF(弓道)	2006	17	17	日本

図1 武道の国際統轄組織の名称、結成年度、加盟国数等
(出所:「現代武道の諸問題—武道の国際化に伴う諸問題—」より作成)

第五節 剣道の普及活動

剣道の人口の少ない国では、指導者や用具が不足している。そのため、剣道連盟では課題解決のために以下の取り組みを行っている。

1.指導者講習

毎年7月末、埼玉県で外国各剣道連盟の将来の指導者養成を目的として、指導法・日本剣道形・審判法を中心とした指導者講習会を実施。

2.審判講習会

毎年1回、アジア・アメリカ・ヨーロッパの各ゾーンにおける審判講習会の実施。

3.講師派遣による指導と審査会

全日本剣道連盟から各地域や国に指導者を派遣し、指導法・日本剣道形・審判法について指導を行ったり、審査を実施している。

4.剣道具の提供

環境が整っている一部の国は別として、いずれの国も剣道具が高価なため入手が困難な状況にある。全日本剣道連盟は、毎年、新品と中古の剣道具を取り混ぜて、必要とする地域や

国に送付している。しかし、海外には剣道具を修理する専門の職人が居ないことから、特に破損しやすい小手は、各自が自己流で補修しているのが実情である。

剣道の国際普及のためにこのような取り組みがなされているが、図1から読み取れるように柔道、空手道など同じ武道と比較してみても国際発展への大きな進歩につながっているとは言い難いのが現状である。

図1に示した普及活動の意図については、単に勝敗を競う競技としての剣道を普及させるためのものではなく、「剣道の理念」である「剣道は剣の理法の修練による人間形成の道である」という考え方を伝えることを主たる目的としている。単に勝敗にこだわったスポーツのような競技として広めようとすれば、もっと簡単に広めることは可能であると思われる。ただし、剣道の理念を残したまま普及させようとするため、なかなか世界各地で広く受け入れにくいものとなっているのではないかと考えられる。

第二章 柔道国際化の過程と現状

第一節 柔道の始まりと国際化

現在、日本をはじめとして世界各国で盛んに行われている柔道は、嘉納治五郎氏が1882(明治15)年に東京下谷北稲荷町にある永昌寺で指導を始めたのが原点である。嘉納氏は、日本に古くから伝承している格闘技である柔術を学び、様々な流派の長所を研究し、改善を行って、新しい柔術の技術体系や指導体系を確立させた。そして、「道」(原理)があつて「術」(技芸)が生まれるという考えから「柔道」と名付けたとされる。

その後、柔道に取り組む人の数は増え、組織もだんだんと大きくなり、様々な行事も行われるようになった。柔道は学校でも、1887(明治20)年ごろから課外授業としても取り入れられるようになり、1931(昭和6)年には正科目としても取り上げられた。また、警察だけでなく、軍隊・会社・町道場でも盛んに行われるようになった。

ども同時に普及していると言えるのではないだろうか。

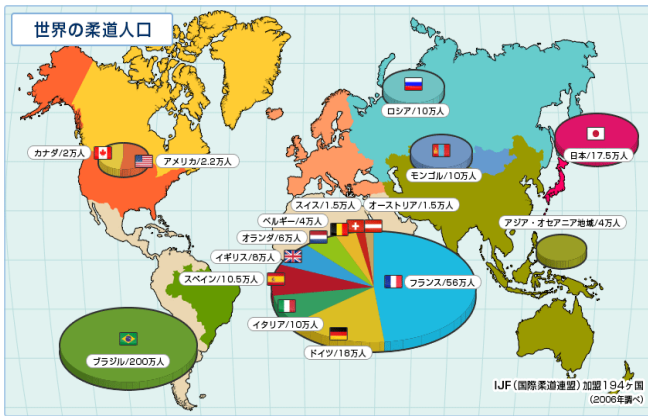


図2 世界の柔道人口分布図
(出所：柔道 Grappling より)

図2から読み取れるように、柔道は日本の国技でありながらブラジルの柔道人口が200万人、フランスが56万人と日本の柔道人口の17.5万人を大きく上回る数となっている。柔道が日本の国技でありながら日本だけに留まることなく世界中に受け入れられている。とくに競技人口の多いフランスとブラジルに関しては小学校で柔道が必修科目あるいは選択科目となっており選択科目でありながら8割以上が受講することも珍しくはないという状況である。

柔道の国際化は、1964年のオリンピック種目になったこと他に、その前の1956年の第1回世界選手権大会が東京で開催されたことにもよる。この大会には21カ国から31名の選手が参加した。これらの大会を運営するのは、国際柔道連盟のスポーツ委員会が主体であり、審判委員会において審判既定の改定が行われて試合の進行が成される。国際柔道連盟は1951年に欧州を中心に17カ国で結成されたが、現在では187の国と地域が加盟しており、全てのスポーツの中で見ても世界第3位の加盟国数を誇っている。

このように柔道は短期間の間に世界に普及したスポーツである。日本発の柔道が世界の隅々まで普及、浸透していて、多くの場合少年少女を含めて世界中の人々が柔道における礼儀や規律などをしっかりと学んでいてそれを実践していることは素直に喜ぶべき点であり、日本柔道が良い効果をもたらしていると言える。世界を見渡してみると人口わずか540万人の小さな国のデンマークでも日本武道の愛好者がいるという状況だ。このことから分かるように日本の柔道はただ単に短期間の間に普及したのではなく、柔道における礼儀や規律な

		男子		女子		計		対五輪総数比	
		総数	金メダル	総数	金メダル	総数	金メダル	総数	金メダル
1992	バルセロナ	5	2	5	0	10	2	45%	67%
96	アトランタ	4	2	4	1	8	3	57%	100%
2000	シドニー	4	3	4	1	8	4	44%	80%
4	アテネ	4	3	6	5	10	8	27%	50%
8	北京	2	2	5	2	7	4	28%	44%
12	ロンドン	4	0	3	1	7	1	18%	14%
16	リオデジャネイロ	7	2	5	1	12	3	29%	25%

図3 日本柔道の五輪メダル獲得数
(出所) 東京新聞 2008.8.17 ほかにより作成

第二節 「柔道」と「JUDO」

図3から読み取れるように、バルセロナオリンピック(1992年開催)からアテネオリンピック(2004年)までは、日本柔道の金メダル獲得数はいずれの大会でも5割以上となっていたが、北京オリンピック(2008年)では44%という結果となり5割を下回り、ロンドンオリンピック(2012年)ではついに金メダル1個で14%となった。リオデジャネイロオリンピック(2016年)では、25%と回復の兆しを見せたものの、かつての獲得数には遠く及ばない結果となっている。オリンピック競技となり、世界に普及したことにより各国の選手の競技力も上がっている。つまり、オリンピック競技になったことで世界全体での柔道レベルがより上がったと言える。

柔道は東京オリンピックを境に世界に普及し、今や「世界のJUDO」とまで言われるまでになった。しかし、世界に普及したために武道の「人間形成」という本質が失われてしまっているのではないかという意見が多く出ている。「JUDOは日本で行われてきた柔道とは別のものである」と諸外国で行われているものと日本で行われているものを区別しようとする意見もある。

確かに「JUDO」と書き表す背景には、表面的には柔道が国際化したという意味も含まれているかもしれないが、「柔道」が「人間形成」という本来の目的を忘れた異質の身体的スポーツになってしまったのではないかという考えが含まれているのかもしれない。日本の国技である柔道が世界に広く普及して多くの人から愛されることは喜ばしいことであるが、国際化の過程で柔道の本質が変わってしまったのでは本末転倒である。

1961年の世界大会で優勝、1964年の東京オリンピックで

は金メダルを獲得、オランダ柔道界の振興のために強化選手として指導したアントン・ヘーシンクという人物がいる。彼は、日本の外での柔道の発展に尽力しつつも、日本柔道界の変化に戸惑い、違和感を覚えていたのも事実である。IOC委員となったヘーシンクは「柔道は日本で始まり、1964年に五輪の正式競技になった時点で世界のスポーツになった。日本は発展に貢献していると思っているかもしれないが、スポーツとしては日本の外で発展した」（1995年朝日新聞）と語っている。この言葉は、日本の柔道が、世界に普及していく中で、JUDOへと変容していることを端的に表している。

第三章 剣道の国際化とオリンピック

第一節 国際化への動き

2015年に日本武道館で開催された世界剣道選手権大会の閉会式で、次回開催国の韓国を代表してあいさつをした大韓剣道会の李種林会長は「剣道が五輪競技に採用されるよう、すべての（各国国内）連盟に協力してほしい」と訴えた。国際オリンピック委員会が五輪開催都市に実施種目の提案を認めたことによって、五輪競技ではない多くの競技団体が20年東京五輪採用へアピールを行うようになった。

そのような中、国内発祥の有力競技でありながら、剣道はあえて一線を画した。FIKは敢えて国際オリンピック委員会の承認を受けようとしてこなかったのだ。全日本剣道連盟の関係者は「五輪を目指すつもりはありませんからね」とも語っている。もしも、国際オリンピック委員会の承認を受ければ、万人に判定の分かるルール変更など、大幅なスポーツ化への変容は回避できない。ポイント制や青色道着が採用され、だれもガッツポーズをとがめなくなった柔道の現状を、多くの剣道関係者たちは失敗とみていたのだった。2007年8月29日に開催された日本武道学会創立40周年記念大会シンポジウムで当時、国際剣道連盟副会長であった福本氏は演説の中で「剣道がスポーツになってしまったら終わりだろう」と述べている。

しかしながら、FIKの中には五輪採用を求める勢力もある。その中心が韓国である。先に述べた、武道の聖地である日本武道館で行った李会長のスピーチは、断固として五輪競技にはしない全日本剣道連盟への宣戦布告ともとれる。また、そのスピーチに対してある程度の拍手が起こったのだが、全日

本剣道連盟からしてみれば想定外のことであったに違いない。

FIKの考えは、日本剣道を理解する人々に対してのみ、海外に普及し、正しい日本剣道の発展を遂げたいとするものである。全日本剣道連盟は、あくまでも日本剣道そのものを世界に発信していき、日本の伝統文化としての剣道を定着させようとする姿勢を変えるつもりはない。そのため、現段階では、事実上、日本が主導権を握るFIKが主催している世界剣道選手権大会において、日本剣道が独自の形を崩さないように保たれている。

この背景には日本だけではなく、FIKの最大の勢力であるヨーロッパ剣道連盟(EKF)の影響力が大きく関係している。ヨーロッパ剣道連盟は日本の伝統文化である剣道に敬意を表していて、剣道の競技性よりも文化性に興味を持っていて、その文化性から何か学ぼうという考えである。それを裏付けるかのように、ヨーロッパ剣道連目に所属するメンバーの大多数は、全日本剣道連盟が主催または、後援となっている各ゾーン別剣道連盟の6段以上の高段位審査を受講する。このことから、ヨーロッパ剣道連盟は全日本剣道連盟を支持する方向にあることが分かる。

第二節 オリンピックと剣道

直近の2016年に開催されたリオデジャネイロオリンピックでは205の国と地域が参加した。1896年開催のアテネオリンピックと比較するとその差は約14倍になる。参加国・地域の数からも分かる通り、今やオリンピックは世界中のスポーツに携わる人たちの憧れの舞台であり、世界中から注目される大会となっている。国際オリンピック委員会によると、リオデジャネイロオリンピックのテレビ中継の視聴者数は、最終的に世界の総人口の約半数にあたる36億人にのぼった。このことから分かるようにオリンピックには他の国際大会にはない特別感、そして莫大な影響力がある。

このオリンピック競技に剣道が正式種目となることで、世界の剣道人口は大幅に増加することが予想できる。また、世界中から注目されるオリンピックの場で日本剣道の本質である人間形成、礼儀を重んじる姿勢というのを日本の選手団が示すことによって、周囲の人から見ても剣道は人間形成の道であり、勝負にこだわる競技性だけに留まらないことが伝わるのではないかと考えられる。

おわりに

柔道の国際発展の過程を見て、国際大会におけるルール変更には違和感を覚えた。日本で生まれた武道であるのにも関わらず、万人受けするために世界に合わせたルールに変えていく。国際発展は競技力向上、競技人数の増加など見込めるが、その過程の中で本質が変わってしまったのでは意味がないのではないかと本研究を通して強く感じた。

また、本研究を進めていく中で、剣道はオリンピック種目に入っているスポーツと比べ競技人口は少なく、知名度もそれほど高い競技とは言えないが、これらの要因がオリンピック種目に入らない最大の要因ではないことが分かった。オリンピックの持つ本質と剣道の持つ本質が全く異なるものであるということが最大の理由であるからだ。そのことから考えるとオリンピックどころかアジア大会ですら開催されていないことにも納得がいく。3年に1度開催されている世界剣道選手権大会も全日本剣道連盟側からしたらあまり開催に乗り気ではないのではとも思えてくる。日本全国には多くの剣道家がいて、剣道は国際発展などせずとも今のままで十分だと考える人もいれば、私のようにもっと多くの人に剣道の存在、面白さを知ってほしい、剣道がメジャーなものになって欲しいと考えている人もいることが現状である。無理にオリンピック種目にはせずとも、剣道独自の本質を理解し、他国の剣道家にしっかりと本質を伝えることによって全日本剣道連盟をはじめ、剣道に携わる多くの武道家たちの納得のいく国際化が可能になるのではないかと考える。

参考文献

- ・安部一郎(1974)「国際柔道連盟スポーツ委員会に出席して」柔道1月号、講道館、19-21頁。
- ・尾形敬史(1997)「審判規定の変遷」『競技柔道の国際化』不味堂出版、41頁。
- ・川口孝夫(2002)「世界ジュニア選手権大会・審判報告」柔道9月号、11-15頁。
- ・坂上康博(2010)海を渡った柔術と柔道、東京、青弓社、p. 9.
- ・財団法人全日本剣道連盟(2003)「剣道の歴史」全日本剣道連盟。
- ・松本芳三(1973)「国際柔道試合審判規定の改正」柔道9

月号、講道館。

- ・村田直樹(2011)「柔道の国際化《その歴史と課題》」(株)ベースボール・マガジン社。

- ・山口香(2012)「女子柔道の歴史と課題」(株)ベースボール・マガジン社。

- ・大石純子(2016)「国際開発における剣道の現状と可能性」

- ・小田佳子,近藤良享(2012)「日本 KENDO の国際発展への課題～韓国剣道との相克を中心に～」

- ・柏崎克彦 「現代武道の諸問題」—武道の国際化に伴う諸問題—

- ・佐藤健太郎「柔道の歴史と国際化～これからの柔道～」

- ・名雪拳矢 「柔道」と「JUDO」の比較～柔道の国際化について～

- ・西村慶士郎「剣道の国際化～剣道がオリンピック種目にならない現状と課題～」

- ・剣道 歴史 | 日本伝統国技、柔道と剣道を知ろう

http://www.2012kagayaki.jp/results/k_rekisi.html

- ・サンスポ【乾坤一筆】「武道」であり続けようとしている剣道

<http://www.sanspo.com/sports/news/20150605/spo1506051300002-n1.html>

- ・社会実情データ図録

<http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/3982.html>

- ・図録 オリンピック・メダル数(金メダル数)の推移

<http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/3980.html>

- ・全日本剣道連盟 <http://www.kendo.or.jp>

- ・全日本剣道連盟 <http://www.judo.or.jp/p/17296>